十月定例能番組

平成二十九年十月一日(日) 午後一時始
於 石川県立能楽堂

半蔀（能）

シテ 渡邊荀之助
ワキ 苗加登久治
間 荒井亮吉
後見 広島克栄 松本博
大鼓 田中一義
小鼓 多田順子
笛 江野泉
地謡 寺田茂 佐野弘宜 山本貢伸 藪俊彦 舘聖 渡邊茂人 田屋邦夫 川島英治

休憩 二十分

謀生種（狂言）

甥 若生敏郎
伯父 能村祐丞
後見 鍋島憲

経政（仕舞）

クセ 佐野由於
地謡 藪克徳 広島克栄 佐野玄宜 山﨑健

阿漕（能）

シテ 髙橋憲正
ワキ 平木豊男
ワキツレ 北島公之
間 山田譲二
後見 松田若子 福岡聡子
大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒俊介
太鼓 飯森友春
笛 片岡憲太郎
地謡 米島和秋 佐野玄宜 水口純治 髙橋右任 船本嘉人 島村明宏 大澤永靖 藪克徳

終了 午後四時三十分頃

解説

能　半蔀（はしとみ）

都北山紫野は雲林院の住僧（ワキ）が、一夏安居の終わる頃、立て続けた花の供養を行い草木国土悉皆成仏と唱えているところへ、集めた花々の中から白い花が微笑むかに見えて一人の女（前シテ）が現れました。たそがれ時と言えば夕顔の花、花の主は五条あたりに住む者ですと僧に答えて、女は夕顔の花を面影に立花の陰に隠れました（中入）。女の言葉に従って僧が五条あたりに来てみると、夕顔の昔の住まいはそのままで、戸口は草に閉ざされ、窓から夕日が差し込んですぐに消えます。東の窓の外には澄んだ月が空に掛かり、垣根越しの山の秋は心にしみて物寂しいことです。弔いを約束した僧の前に、草葉の覆う半蔀を押し開け、夕顔（後シテ）が花の姿を現して出ます。夕顔は光源氏との契りの初めを思い返し、自身ついの宿りと呼ぶこの五条の家で、夕顔の花の縁で結ばれたうれしさを述べて、光源氏の言葉「花の夕顔」を反芻しながら懐旧の舞を見せて去ります。

狂言　謀生種（ほうじょうのたね）

嘘の巧みな伯父と挑戦する甥による作り話の競争です。富士山に紙袋を着せる話には琵琶湖の水を茶に立てて飲み干す話。印南野に寝て淡路島の草を食う牛の話には三里四方の太鼓の話。そんな太鼓に張る皮がなかろうと言えば、そなたの言うた印南野の牛の皮よと言い負かされます。降参した甥は嘘の秘訣を教わり、謀生の種という嘘の種を庭土を掘り返して探しますが、種のあること、埋めたことが、すでにこれもが伯父の嘘でありました。

能　阿漕（あこぎ）

禁断の海での密漁が露見して水底に沈められた漁夫の物語です。伊勢の国にあるその海を、漁夫の名をとって阿漕が浦といいます。初秋の一日、日向の国を出た僧（ワキ・ワキツレ）が神宮参詣の途中に通りかかると、釣り竿をかたげた漁翁（前シテ）が現れ、殺生を生業とする悲しみを述べます。僧も漁翁も共に和歌に明るく、歌学の知識を確かめたあと、求めに応じて漁翁が地名のいわれを語ります。この浦が禁漁となったのは、伊勢の神饌に供するためです。その掟を破った阿漕は刑死し、地獄でも殺生の罪を責められます。そう告白する漁翁は僧に回向を頼み、悲痛な叫び声を残して漁り火のように消え失せます（中入）。読経する僧の前に再び現れた阿漕（後シテ）は網を持ち、漁るわざの虜となって罪を重ねる様子です。そのうちに波は猛火、獲物は悪魚毒蛇と変じて、息つく隙ない地獄の罰が展開します。救済はならず、波にのまれる亡者の声が丑三つの闇に響きます。

（金沢大学人間社会学域教授　西村　聡）

次月の予定　平成二十九年十一月五日（日）午後一時始

（能）竹雪　（狂言）鐘の音　（能）土蜘